

瀬戸内も温暖な地域ではあるが、鹿児島の際は輪をかけて陽気だ。春の夜でも海の上を走ればまたたく間に汗だくとなる。空には満天の星が輝いている。このあたりだと水平線近くに南十字の一端が見えるそうだが、星がひとつだけ見えたところではそれはただの星でしかなくろうし、誰もそれが南十字だとは気づくまい。

私——巡洋艦矢矧——は星明りのもとで海に目を凝らした。先行する大和は足の速い艦娘ではない。彼我の速度差を考えればそろそろ追いつくはずだった。私は耳の後ろに手をやり電探を起動させた。複合視覚がもたらす白黒の世界……その中に白い影が小さく見えた。

頭の中で指令を下すと機関妖精が唸り声で応えた。程なく足にぐっと抵抗がかり、頬に当たる風が勢いを増した。視界の中央に白い影——大和——を据えたまま、私は夜の海をまっすぐに進んでいく。

* * *

私が大和と初めて会ったのは戦況もいよいよ窮まってきた年の一月、松も明けた頃のことだった。執務室に呼び出された私は提督に大和を紹介された。ウォルナット製の大きな執務机と、その横に立つ艦娘。件の執務机を見慣れている私は大小関係の狂いに軽い目眩を覚えた。縮尺がおかしい。こんなにも大

きな艦娘がいるのか。それが大和の第一印象だった。

大和は確かに大きかったが、粗野な印象はまるで受けなかった。東京へ向かう汽車の窓から見た富士山、その裾野から山頂に至るなめらかで調和の取れた曲線……大和の出で立ちには雄大な成層火山^{コニイデ}を思わせた。私は裾野から山頂へと彼女を見上げた。肉感的であるが決して下品にならない絶妙なバランスをした身体があり、その上に目鼻立ちのはっきりとした顔が乗っている。その更に上、てっぺんでは焦げ茶の髪が後ろにまとめられて尾根をなし、重力に従ってずっと落ちていた。

「はじめまして」と彼女は言った。想像よりも小さな声だった。私はいつも以上に背筋を伸ばして敬礼し、彼女に挨拶をした。提督は彼女が特別攻撃の要員としてこの泊地に配属されたことを述べ、私に世話役をやるようにと言った。

挨拶が終わり、私は大和を案内した。泊地の建物を回る間、彼女は終始笑顔を崩さなかった。私は努めて歩幅を大きく取ったが、彼女はどうも努めて歩幅を小さく取っているようだった。向こうからやってきた雪風が口をあぐりと開けて大和を見上げ、それから弾かれたように廊下の脇に寄って敬礼をした。

その後、大和がすぐに泊地の艦娘たちに馴染んだかというところ、そうはならなかった。彼女は私たちと同じ訓練に参加しなかったというのがその理由のひとつである。特攻要員である彼女は、艦装が常軌を逸した「大食らい」であることも災いしてか海に出ることはなかった。そしていまひとつの理由は彼女がまとう雰囲気だった。彼女は常に微笑みを浮かべていたし、そのふるまいに無礼なところなど何ひとつなかったにもかかわらず……近くに寄ると空気の温度が下がったように感じられるの

だ。あの巨大な肉体を動かすための心臓の拍動が感じられない……大和は社に棲む白い大蛇を思わせる、神聖でぎよつとするような空気をまとっていた。常日頃がそんな調子であるため、食事の際も大和は騒がしい我々水雷戦隊から離れ、いつも一人で食べていた。声をかけて一緒に食べたことも何度かあったが、彼女はにこにこ笑って半盛りの飯を食べるだけで、会話らしい会話が続くことはなかった。

あるとき、部下の駆逐艦——磯風——が大和とすれ違ったあと、その背に向かって手を合わせているのを見た。それは同じ泊地の艦娘にとる態度として全く適切なものではなかったの、私は部屋に磯風を呼び出して注意を与えた。磯風は自らの非をあつさり認め、頭を下げた。

「しかしね、矢矧さん」磯風は続けた。

「あの人の魂は、もう靖国にあるのではないかと思う。言ってしまう、あれは死人だよ。即身仏か、現人神か、そういう類じゃないか」

磯風は長い黒髪を手櫛でかきあげ、臆面もなくそう言い放った。こういった直言放言は磯風の得意技で、私はその場で磯風の放言に対して制裁を加えるべきだったのかもしれない。しかし、私はためらってしまった。磯風の言はある種の本質を芯に食っていた。そう、大和は特攻のためにこの泊地へと配属されてきたのだ。

特攻、つまり特別攻撃とは一命を捨てて敵に一矢を報いる「必死」の戦法である。マリアナでやられて戦況が厳しくなってきたからその名前を聞くようになり、こししばらくは毎日のように口端に上っていた。大きな声で言える立場になかったの、だが私は特攻をよく思っていなかった、もとい、水雷屋には合

わぬやり方だと考えていた。無論、水雷戦隊に命を惜しむような者はいない。私たち水雷屋にとって「決死」の戦法というのは日常茶飯である。その汪溢する生命力と精神力とで敵に肉薄して必殺の魚雷を叩き込み、それでもだめならエイヤツと刺し違える……水雷屋はそういうことをずっとやってきている。だがそれは「決死」であって「必死」ではない。生還を企図せぬ作戦はその性格を異にする。大和のあの恬淡としたありようは私たちの泥臭いありかたとは異なる。思うにそれは「決死」の戦法を取る者と「必死」の戦法を取る者の違いではなかったか。「必死」の戦法をとる者はすでに死んでいる……磯風の言葉にも一理あるように感ぜられた。日本刀の刃は研ぎ澄まされているが、そこに溢れんばかりの生命力はない。あるのは刃の形に結晶した意志の力だけ。理想の艦娘を形にしたような容姿と立ち振舞をしていても、大和はすでにその身をひと振りの剣、ひとつの無機物へと変じている……磯風はそれを「即身仏」だと言った。私はいつだったか奥州の寺で見た木乃伊を思い出した。即身仏になろうとする僧侶は五穀十穀を断ち、土中で瞑想にふけるという。大和が食堂でとる食事があの巨体からは信じられないくらいに少ないのと、妙に符合していた。

それは磯風の放言からしばらく経った日のことだった。夜遅くに烹炊所の前を通ると、調理台に隠れて動く影があった。随分と大きな鼠である。嘆かわしいことに泊地にはこうした大きな鼠がしばしば出没する。大喝すると、観念したのかすぐごと二人の駆逐艦娘が現れた（武士の情けで、彼女らの名は伏せておく）。私は水雷戦隊旗艦として秩序の維持に必要な措置——げんこつ——をとり行い、彼女たちを部屋に返した。調

理台の裏を覗くと、蓋の開いた缶詰がふたつあった。中を見てみると果たしてぎっしりと餡子が詰まっている。不屈者たちはどうやら夜闇に紛れて小豆の缶詰を楽しんでいたようだった。

さてこの缶詰を如何せん。蓋が開いてしまった以上、使い物にならないだろう。かといって明日を待って主計に申し出ても「蓋が開いてしまったから」という理由で主計が特別食として食べてしまうのは目に見えている。主計の艦娘ときたら近頃とみに肥えてきていたので、それに食わせるといいうのもいささか業腹だ。

懺悔すると、私はこの小豆缶を失敬して持って帰ることにした。私だって艦娘の常として甘いものは嫌いではなかったし……猛訓練と残業の日々はしばらく続きそうだったので、ささやかな楽しみがあっても良いじゃないかと思ったのだ。少なくとも今は、そう言い訳させてもらおう。

私はいったん共用棟から出て、人通りの少ない外を通って宿舎に向かおうとした。やましき後ろめたさがそうさせた……というより、この深夜に両手に小豆の缶詰を持っているというのは現行犯に等しい。誰かと鉢合わせをするのは避けたかった。

しかし、会いたくないときほど会いたくない相手に会うものである。角を曲がろうとしたとき、ぬうつと小山のような影が私の前に現れた。夜戦は何度もやっていたしそれなりに胆力はある方だと自負していたが……それでも思わず「うわっ」と声が出してしまった。

「矢矧さん？」

おずおずとした口調で影はそう問うた。万事休す。私は両手に缶詰を持ったまま、観念して答えた。

「……はい」

小山のような影——大和——は私をじっと見ていた。いつもの超然とした澄んだ目……ではなかった。視線の先は私の持つ小豆缶に向いていた。

「……食べる？」

私の間の抜けた返答をどうか笑わないでほしい。いかに気が動転していたとはいえ、もう少しましな取り繕いようがあったろうに！ さっと耳のあたりに熱いものが込み上げてきた。私の内心で吹き荒れる混乱を知ってか知らずか、大和は少し間をおいてからためらいがちに頷いた。

私たちは宿舎を離れて、浜の方へ向かった。大和のそのそと緩慢な動きで私のあとをついてきた。浜に出てからコンクリートの堤防を風よけにし、私は大和に缶をひとつ渡した。小豆缶は大ぶりなもので、私は何日かけて食べるつもりでいたのだが、匙を渡すと大和はものの数十秒でべろりと平らげてしまった。ふう、と満足気に息を吐く音が聞こえた。私が目をやると大和は口元を両手で押さえた。なんだかその様子がひどく滑稽に思えて、私はひとくち食べたきりの缶を差し出した。

「それは、矢矧さんの分じゃないですか？」

私が「あげるわ」と答えるが早いか大和はぬつと手を伸ばし、私の手元から缶を持っていつてしまった。月光のもとで大和は黙々と匙で缶の中身を掬う。あつという間に空き缶はふたつになった。驚くべき食欲だった。

「よく食べるのね」

私の声には驚きとも呆れともいえないぬ感情が滲んでいたことだろう。大和は「ごめんなさい」と小さく答えた。たっぷり二缶の甘味……確かに惜しいことをしたとは思うし、少しくらい残してくれても良かったとも思うけれど……あまりにもきれいに

食べられていたので怒る気にはなれなかった。

「責めているのではないわ。ちよつと驚いただけ。ここの食事はあなたの口に合わないかしら」

大和は首を横に振った。ここのご飯は美味しいです、と。それから大和は背を丸め「皆さんの手前、そんなに食べるわけにも行かなくて」と言つて寂しそうに笑つた。大和が小さく見えたのは、これが初めてのことだった。

私が大和に食べ物を持つていくようになったのはそれからだ。戦況は日に日に悪くなり、輸送船が沈められて物資輸送が滞ることもあつたが、艦娘への食料供給は十分すぎるくらいになされていた。とはいえ、銃後では食うや食わずのところもあると聞いていたし、水雷戦隊の艦娘には寒村から口減らし同然で海軍に入つた者もいる。大和が食べる量を減らしていたのも、出撃を許されぬ中でそういった事情に配慮したところがあつたのだろう。

その日も私は、残つた白米（私は一応士官なので食事は自弁していた。麦飯も悪くはないのだが……）でこっそり握り飯を作り、浜へ持つていった。大和が先に來ていることはすぐに分かつた。結われた髪の毛の頂点と簪が、ちょうど堤防からはみ出して見えたからだ。

大和に声をかけ、握り飯を手渡したときのことだった。ウィツ！という大音響が宿舎の方から鳴り響いた。季節が春らしくなつてからというもの、敵の空襲が増えてきていた。サイレンの音に追い立てられるようにして、探照灯の光の中を一機また一機と紫電が空へ駆け上つていく。

「早く、防空壕へ」

私は大和を促した。敵の攻撃機には基地航空隊があたるが艦娘に損耗を出すわけにはいかない。敵襲があれば艦娘たちは皆、最寄りの防空壕に駆け込む手はずになっていた。私たちは一目散に駆け出した。

「矢矧さん、これどうしましょう!？」

大和が握り飯を両手に走りながら叫ぶ。

「食べてしまつて！防空壕で見つかると面倒だから」

幸いにして私たちが飛び込んだ壕には先客はいなかった。赤く薄暗い照明の下、私は息をついて大和の方を振り返り……危うく吹き出してしまふところだった。大和の頬は大きく膨らみ、栗鼠のようになつていた。その頬袋には握り飯がしっかりと詰まつているに違いない。大和が露骨に不機嫌な表情を浮かべながらも握り飯を咀嚼（そしゃく）しきるまでの間、私はずっと忍び笑いを漏らしていたように思う。

大和が食べ終わる、私が笑つたことを詫言終る頃にはサイレンは鳴り止んでいた。爆撃や機銃掃射の音はせず、帰還する紫電のエンジン音が間歇的に聞こえるだけ……静かな春の夜が戻つていた。

私は防空壕を出ようとして視線を上げ、大和の手首に何かが結ばれていることに気づいた。私が何かと聞く前に大和は言つた。

「勤勞奉仕の子からもらつたんです。可愛いでしょう？」

大和は手首を曲げてそれを示した。大和の手首からぶら下がつていたのは縮緬（ちぢめん）の端切れで作られた五センチほどの人形だった。おかっぱ頭で、もんぺを履いている。間近で見せてもらうと、縫い目にはまだたどたどしいものがあるが丁寧（ていねい）に作られており、ところどころに工夫と苦心の跡が見えた。

「手紙も……ファンレターって言うんですかね、もらっちゃいました。『どうかお一人だと思わないでください。敵と相果るときは私もこのお人形になってお供をいたします』って書いてありました」

大和は薄く笑い、白く長い人差し指で慈しむように人形の頭をなでた。大和は勤労奉仕で泊地にやってくる少女たちには人当たり良く接していた。少女たちは艦娘——それも特攻に赴かんとする大戦艦——の身の回りの世話をできることを心から喜んでるように見えたし、休み時間には大和を中心にちよつとした人だかりができていた。この人形を作ってくれたのもぎつと大和に心酔する少女たちの一人なのだろう。この人形はまぎれもなく真心から生み出されたものかもしれないが……敵と刺し違えてくれるわけではなかった。

「本当に、一生懸命作ってくれたんだあって」

そう言って笑う大和に、私は何も言葉をかけられなかった。大和は出撃の日が近づいていたことを知っていたのだと思う。

「矢矧さんはそれでいいと思ってるのか」

私が作戦を説明し終えたあと、磯風は開口一番にそう言った。私は会議室内を見渡した。磯風、初霜、霞、雪風、朝霜……駆逐艦たちは皆、多かれ少なかれ戸惑ったような表情を浮かべていた。ただ一人、大和だけが瞑目し、超然とした雰囲気を保っていた。無理もないことだった。私たち二水戦の任務は大和の護衛……それも海域途中の第三地点までの護衛であつた。そこから大和は敵主力がいると目される第四地点に向かって「任務」を果たし、私たちは泊地へ引き返す。私たちには第三地点までの往復の燃料が、大和には第四地点までの片道の燃

料が搭載されることになっていた。

「いい、というのはどういう意味？」

時間を稼ぐ意味で私は聞き返した。どうもこうもあるか、と磯風は吐き捨てた。おそらくは私が命令書を読んだときと同じ憤りを抱いていたのだと思う。制空権のない中で（この国に残された最後の水上戦力たる）二水戦と大和を突っ込ませること、そのくせ中途半端にも二水戦に途中離脱を命じること、そしてただ死んでこいと言っても言わんばかりに大和に片道燃料を与えること……この作戦はすべてがちぐはぐで、胸が悪くなるくらい馬鹿げていた。もつとも、それぞれの指示にはなんらかの理由はあったのだろう。意地と理想と面子と保身がぶつかった末にできる政治的芸術作品^{おとこころ}というのは、往々にしてこういう馬鹿げた形になることがある。それはそういうものだ。腹立たしいのは、国家存亡の際にあってなお、三田の連中が芸術品の制作にかまけていたということだ。

「わたしたちは、なんであれ命令で決まったことには従わなければならぬわ」

割り込んで答えたのは初霜だった。それを聞いた磯風の口元に獐猛な笑みが浮かんだ。磯風は理屈っぽく——和や配慮を重視する初霜とは対照的に——互いに論争できる問柄を好む艦娘だった。だが、磯風の笑みはすぐに消えた。初霜の手が固く握りしめられ、震えていた。

「愚問だった。この二水戦に、これを良いと思う卑劣漢などいるわけがなかったな」

そう言って磯風はにやりと笑い、初霜の肩をぼんぼんと軽く叩いた。

習慣というのは恐ろしいもので、出撃前夜も私は大和に食料を持っていった。壮行会も執り行われていたし今日ばかりはいないかとは思ったが、内心どこか期待していたものがあつたのかもしれない。浜に近づいていくと果たして髪と簪が堤防の上に覗いていた。大和もいつものように私を待っていた。

「いよいよ明日ね」

私がそう声をかけると大和は無言でうなずいた。私は風呂敷包みを解いた。中身はいくつかの缶詰と清酒の四合瓶。大和は瓶のラベルに目をやった。焦げ茶色の腫が驚きに広がった。

「矢矧さん、特級酒まであれしたんですか？」

「安心して。別れの盃がそんなじゃ格好がつかないでしょ。

きちんと提督からせしめた特級酒よ。それと、名譽のために言っておくけど銀蠅は最初だけで……それも私がやったんじゃないわ」

私がそう弁明すると「ずっと誤解してました」と言つて大和はくすくすと笑つた。それは不名譽な誤解だつたけれど、不思議と嫌な気はしなかつた。

手近な岩や流木に腰掛けてから二人で乾杯をして、瓶も半分くらい空いたときのことだつた。

「あの小豆缶、美味しかったなあ」

缶から秋刀魚をつまみ上げながら、ぼつり、と大和は漏らした。清酒に餡子は合わないでしょう、と私が言うとお和はそうですと笑つた。突如、胸が潰されるような寂しさ——後悔と言つたほうが良いのかもしれない——が襲つてきた。彼女は小豆缶が好きだつたのだ。どうして私は、彼女の好物を持つてきてやらなかつたのだろう。

ささやかな酒宴の後、私は空き缶と瓶を風呂敷に包んだ。金

属や硝子は戦略物資で、無駄にすることはできなかった。

「矢矧さん、おやすみなさい」

宿舎で別れるとき、大和はいつものようにそう言つた。いつもと違うのはそこに言葉が続いたこと。

「短い間でしたけど、お世話になりました。ありがとう」

大和は深々と頭を下げた。長い髪が地面につかンばかりだつた。

翌日から始まつた作戦は苦難を極めた……という言葉が甘く聞こえるほどに惨憺たるものだつた。大和、私、磯風、雪風、初霜、朝霜、霞——七隻で出発した私達はまず敵潜の雷撃に見舞われた。めいめいが之字運動を始め、爆雷戦を行い……海面に油が浮かんだのを見届けて再び集まつたときには、朝霜の姿は忽然と消えていた。「機関不調」という無電が彼女の最期の言葉になった。駆逐艦の特徴は小さな身体とそれに見合ふ重い艤装。魚雷をもらつて浮力を失えば悲鳴ひとつ上げる時さえ残らない。いつの間にか消えているというのは駆逐艦の最期としては珍しいことではなかつた。つい先程まで戦闘食の五目握りが甘い辛いと言つていた娘がもういない……あまりにあつてな過ぎで、誰もが泣くことを忘れていた。

次にやられたのは霞だつた。私達は次々と迫りくる空襲をしのいでいたが、一発の航空爆弾が彼女の脇腹を食い破つた。戦闘服の白ブラウスを真っ赤に染め、こぼれかけた腸を手で押さえて戦闘継続を主張する霞を、私は雪風とともに退避させた。あれで彼女が助かるかはわからないが、応急手当を受けて戻れば目はあるだろう。私達の作戦目的はあくまで大和を第三地点まで送り届けること。そのための犠牲は少ないほうが良い

はずだった。

第三地点に着いたのは午後三時過ぎだった。うだるような陽気の海、そこでまた私たちは敵の航空機と戦闘になった。深海戦闘機は嘲るように低空を飛び、近くまで来て機銃掃射をかけた。艦娘の身にとってはさほどの脅威でもないのだが、当たると百足^{むかで}に刺された時のようなひどい痛みが走るうえ、放っておけば妖精が犠牲になる。注意を割かぬわけにはいかなかった。そして、戦闘機ばかりにかまけていればそこに致命の急降下爆撃がやってくる。私たちは汗みずくになりながら右舷へ左舷へと回避行動を繰り返した。

急旋回の繰り返しに方向感覚を失い、自分の位置さえ定かたなくなりそんな中、悲鳴に近い妖精の金切り声が出た。顔を上げると真っ白な敵機が爆弾を抱えて突っ込んでくるのが見えた。反射的に高角砲と機銃を構えて撃った。高角機銃に炙られて火の玉となった敵機が真っ直ぐに突っ込んでくる。ぎりぎりのところで身をよじって躲^{かわ}すと、そのまま敵機は海の中へと突っ込んでいった。阻止できるギリギリの間合い、迷いが生じていたら間に合わなかっただろう。日々の猛訓練は迷う前に体を動かすためにあるのだ。

そうしてどれくらい急旋回を繰り返しただろうか、断続的な機銃の音が止み、空襲は去ったようだった。私は残り少なくなってしまった僚艦を集め、点呼をとった。大和は分厚い装甲に助けられて無事、私と初霜も至近弾を受けたが行動に支障なし。だが、磯風は違った。彼女の左手は半ばちぎれ、左半身にひどい火傷を負っていた。

「まあ、やるだけのことはやったさ。あとは頼む」
磯風がそう言って大和の方に視線をやる。大和は深々とお

辞儀をした。大和はそれからゆっくりと回頭して速度を増し、沈む夕日を受けて進んでいった。

大和が水平線の向こうに消えた後も、私たちはしばらく夕焼けを眺めていた。誰も何も言わなかった。波が足元の艦装をこする音と、通奏低音をなす機関の唸りだけが私たちの間に響いていた。結局のところ私はこの酷い思いつきを実行に移すかどうか迷っていた。ただ、逡巡する時間はあまり残されておらず、皆が私の命令を待っていた。私は初霜に向き直る。

「護衛退避を」

「撤退ではなく？」

私は頷いた。初霜の怪訝な顔が胸に痛かった。

「ええ。あなたが磯風を連れて帰りなさい。私は先に行く」

「矢矧さんは、死ぬつもりですか？」

初霜は私を見上げながら抑揚のない声で言った。私が黙っていると「犬死にをなさるつもりかと聞いているんですよ」と初霜は続けた。初霜は血の多い水雷戦隊にあって驚くほど礼儀正しく温厚な艦娘だった。激することなく淡々と、信念の元に彼女は行動していた。いつになく静かな声と乾ききった真っ赤な瞳……その奥に深い、静かな憤りが見てとれた。初霜は確かに、この土壇場で命令を無視して部隊を捨てようとする上官を咎めていた。

「初霜、好きにさせてやれ。矢矧さんが生きてようが死んでもうが、磯風らの戦争はどのみちここでお終いだ」

助け舟は思わぬところから出た。左手をだらりと下げたまま磯風はそう言って口角を上げた。まったく磯風の卓見のとおり、私たちはもはや戦いを継続できない。轟沈が一、大破が二……すでに全滅に等しい被害だった。かつて「華の二水戦」と

謳われた精鋭部隊も今やこの有様となった。いや、二水戦だけでなく、もうこの国にまともに戦える艦娘は残されてはいない。……だがそれは、私が任務を放棄し感傷主義に殉じてよい理由になるだろうか？

「矢矧さん、世話になった」

押し黙った私の前で、初霜に肩を担がれたまま磯風は笑った。ああいうのを満面の笑みというのだろう。あの深傷では支えられて立っているのも苦しいはずだろうに。そして初霜は磯風を支えながら、その隣で無言で頭だけを下げていた。磯風に肩を貸している手前、腰を折ることはできず首から上だけの礼だった、私にはそれが最敬礼に見えた。

「ありがとう」

謝罪の言葉が口をついて出そうになったのをなんとかこらえ、私は礼を言った。もし私が謝ってしまえば、それは磯風と初霜の心遣いを無にすることになる。すでに私は一度、部下たちに大きな不義理をはたらいた。二度目の不義理をするわけにはいかなかった。

私は踵を返し、大和の向かった方へと進んだ。行き足は軽く、見えない手に背中を押されるようだった。水平線の橙色は徐々に暗くなりやがて夜の帳が下りた。

* * *

「大和！」

私は白い影に向けて出力を絞った無電で呼びかけた。影が動きを止める。小山のような鋼鉄の城、それを背負って立つ背の高い少女のシルエット。近づいていくと複合視覚に頼らなくて

も細かなところまで見えるようになった。後ろで束ねられた焦げ茶の長い髪、観測機器が詰め込まれた特注の簪、指揮杖と電探を兼ねる傘、そして、今は驚きの表情がくつきりと浮かんだ、美しい顔。

「矢矧さん」

返ってきた声は思ったより小さく、震えていた。近くで大和の顔を見上げると目尻にはうつすらと光るものが見えた。私は航行で上がった息を整えた。

私は横に並び、手を差し出した。大和が上からおずおずと手を重ねる。大きな手だったが、軽く握ると手袋越しに震えが伝わってきた。陸の上では彼女のほうが速く歩くが、海の上ではその逆になる。私は大和と歩調を合わせ、ゆっくりと前へ進んでいった。

最初は、大和の背に向けて手を合わせる磯風を見たときだった。缶詰を手には無げに身を縮めた大和を見たとき、贈られた人形を見て悲しそうに微笑んだ大和を見たとき……腹の奥で疑念とも決意とも取れぬものが膨らんでいった。そしてさっき大和の震える手を握ったとき、それは確信へと変わった。

私が艦娘として守りたいものは多くあった。故郷の父母、自然、友人、そして、この国の形。そのために今、私が命を捨てることは最善ではない。私にはまだやれることがあった。戻って部隊を再編すれば、数日は敗戦を遅らせることもできた。たとい戦に敗れても五体満足ならなんとか他の形でこの国を立てていくこともできたかもしれない。だけれども……今、大和のそばにすることができるのは私だけだ。

皆が大和の死を望んでいた……というと語弊があるだろう

か。この作戦を立案した者、その準備をした者、先程まで同伴を務めた私の部下たち、大和に手作りの人形を贈った少女、美談を書き立てる新聞記者、記事を読んで涙を流す善男善女……皆が皆、大和の死を織り込んで動いている。大和の死を前提として世界が……あまりに多くのものが回っている。この世は大きな破砕機だ。私、大和、戦友たち……数多の命をぜんぶ巻き込んで、粉々にして、擦り潰して、それから何もなかったように回っていく。

だが、それでも、世界に一人くらいは気まぐれにも同じ立場で彼女の側に立つ者がいてもいいではないか。彼女の尊厳を守り、見届ける者がいてもいいではないか。私は愚か者だ。裏切り者だ。誤っている。だが、それでも、いいや、だからこそ私は愚か者にしかできないことをしよう。

どれくらい二人で手をつなぎながら夜の海を進んだだろう。止まない雨がないうちに、明けない夜もない。夜が続くことをどれほど望んだとしても、朝に待つものをどれほど望まなかったとしても、やがて夜は明ける。足を止めて東の水平線に目をやると、空が紫に色づいているのがわかった。敵の電探は私達をすでに捉えているだろうか。薄明攻撃のための艦載機はすでに発艦を終えているだろうか。

誰だったか船渠で隣り合わせになった先任の巡洋艦娘が言っていた。「巡洋艦は、叩きのめされて死んでいく」。私も直にそうなるだろう。頼りになる防空駆逐艦たちはもういない。そもそもいたところで制空権がない以上、その結末は大きくは変わるまい。制空権のない海域で艦娘は文字通り「叩きのめされて」死んでいく。執拗に急降下爆撃と機銃掃射を繰り返す敵機を振

り払い、撃ち落とし、機銃弾を受け、至近弾を喰らい、手がもげ、耳が飛び、腹が裂け、ぼろぼろになって死んでいく。それはきつと楽な最期でもなければ美しい最期でもないだろう。

ああ、太陽が昇る。油を流したように匂いだ海。空気は春にはめずらしく澄んでいて音は何ひとつしない。紫、橙、それから白と青。海は短い時間で表情を変えていく。美しく静かな最後の夜明け。大和の隣に立って私はその光景を目の奥に焼き付ける。

私はつないだ手をもう一度握り直した。その手はもう震えてはいなかった。

(了)